

葉集を読む

松岡 隆子

春荒や寡婦に数なき選択肢

矢作 裕子

眸先生に（二人せしこと一人して夕端居）があるが、今まで二人でしていたことを一人ですることの淋しさを思う。それが生活のためにしななければならないことであれば、淋しいなどと言ってはおられない。春が来れば雪囲いを解き、垣を繕い、畑を耕す。今は何もかも一人でやらなければならぬ。〈寡婦に数なき選択肢〉と淡々と自分を客観視する矢作さんの心の底の哀しみを思うと身に詰まされる。季語の〈春荒れ〉が辛い。

三月の川うきうきとしてゐたる

岡 美穂

春は名のみの二月に比べると、仲春三月は気温も上がり本格的な春の到来となる。大地はすっかり温もり、冬眠から覚めた動物たちが動き始める。草木は芽吹き鳥は囀り、躍動感あふれる三月、人々はうきうきと野に出て遊び、野川はうきうきと流れる。岸边にはスミレやレンゲの花が咲き、エビヤ

メダカや小鮒の群れが見える。懐かしい童謡が聞こえてくる。

姉妹して出づることなし花衣

高野 達子

同時句の〈折にふれ思ふ齡や春炬燵〉を併せ読む時、掲句の姉妹がある程度高齢であることが想像されよう。いつも誘い合つて花見に出かけたたり観劇や会食を楽しんだものだが、今はお互いに外出もままならなくなつた。今日は何を着て行くのかなどと、いそいそと身支度をしていた頃を懐かしんでいる。〈花衣〉の一語によつて高野さんの感慨が伝わってくる。季語の力を思う。

表札に名前七人燕来る

鈴木 富代

表札は一般的には世帯主の名字や氏名が書かれたものが多いが、時に家族全員の名前が書かれているものも見かける。七人の名前が書かれた表札に思わず足が止まる。一人一人の名前から明るい二世帯住宅の暮しを垣間見る思いだ。ペランダには竿いっぱいの洗濯物が干され、ポーチの隅には自転車三台、三輪車があつたりするかもしれない。七人の名前の書かれた表札を目ざとく見つけて燕たちが飛んでくる。

服薬の湯呑みが一つ春炬燵

宮田 悦子

春炬燵の上にはつんと置かれた湯呑み、それは服薬のためという。体調が悪いのだろうか。風邪でも引かれたのだろうか。炬燵の上に置かれた一つの湯呑みが、炬燵の温もりに身